母のひろば634号　2017年３月15日発行

母のひろば 634

doshinsha / haha no hiroba

わたしが読んだ童心社の本①　中村柾子　２
童心社創業６０年を迎えて　３－５
詩／ペンペン草　新沢としひこ　６
新刊紹介／三輪丈太郎、溝口義朗　７

イラスト／いわさきちひろ（表紙『おふろでちゃぷちゃぷ』(1970年)より）

創業６０周年を迎えて

酒井京子

童心社は、本年３月、創業60周年を迎えました。

この60年間を支えて下さった、読者の皆様・著者の先生方に、心からお礼を申し上げたいと思います。

1957年という創業の年は、前後していくつかの児童書出版社が生まれ、子どもの本への期待に溢(あふ)れていた時代であったように思います。童心社は、紙芝居の出版社として産声をあげたのですが、創業３年目には、絵本の出版も行うようになっていきました。そして、紙芝居と児童図書の出版社として歩んできました。

この歩みは、新しい世界をつくるという喜びに満ちていたとはいえ、決して順風満帆(じゅんぷうまんぱん)ではありませんでした。オイルショックやリーマンショック等の経済状況の激変や、1960年代のテレビの普及、そして近年のIT化は、出版活動に少なからぬ影響をあたえたと思います。

童心社は大きな波が押し寄せるたびに、「何故、子どもたちのための出版活動を続けていくのか？」という根本的な問題を突き付けられました。また同時に、目まぐるしい社会の変化の中で、「子どもは変わったのか？」という問いも考え続けてきました。そして、出版活動の中で、その時どきの答えを出してきたように思います。想いの強い、深く考え抜かれた作品は幸いなことに、ロングセラー・ベストセラーとなって今も成長し続けています。

出版活動を支えたもの、それは、子どもたちへの信頼であったと思います。

子どもたちが、心の奥で本当に求め、欲している作品を創り出すこと、希望を語ることが一番大切であり、子どもたちは、それをきちんと受けとめてくれる。このことは、60年間の歩みの中で確信となりました。

しかし、子どもたちの柔らかな魂に届く作品を創りたいという願いとは裏腹に、表面的で表層的なものを良しとする風潮が大きくなり、同時に子どもたちの幸せの絶対条件である平和が脅(おびや)かされかねない状況もあります。子どもが子どもらしく生き抜くことができる、その力になりうる図書と紙芝居を、これからも地道に出版し続けていきたいと願っています。

（さかい　きょうこ／株式会社童心社会長）

創業60年記念
わたしが読んだ童心社の本 1

いない いない ばあ 大好き！

中村柾子

なかむら まさこ／幼稚園教諭、保育士として勤めた経験を生かしながら、退職後も絵本とかかわり、絵本について考え続けている。著書に『絵本は ともだち』『絵本の本』（共に福音館書店）などがある。

松谷みよ子／ぶん　瀬川康男／え

いないいないばあは、赤ちゃんの大好きな遊びです。いつもそばにいる人が、両手で顔を覆い「いないいない」の声とともに隠れると、「ばあ」とあらわれる。単純極まりない遊びですが、実によくできていると思いませんか。いないいないばあは、一、二の三というリズムですね。目の前の人が顔を隠してしまうのですから、あれっと思うのは当然。でもすぐに目の前にあらわれる。子どもにとって、こんなにうれしいことはないでしょう。あるとき男性保育者がいたずら心を起こして、「いないいない」の間に机の下にもぐり、ばあと出てきました。そのときの一歳児が見せた驚きを忘れることができません。なかにはおびえている子どももいます。彼が何をしたかと言えば、きつねの面をかぶって出てきたのです。見知った顔との再会が約束事なのに裏切ってしまったのです。もちろん彼は自分のしでかした罪をいたく反省したのでした。かくも、いないいないばあは、人と人との間で交わされる遊びなのです。

ところが、この数年、おやっと思う話を聞くようになりました。スマートフォンのアプリにこの遊びがあるらしく、一、二歳の子どもが自分で操作して、いないいないばあをしているというのです。人の声のトーンや出てくるタイミング、表情、遊び方の工夫などのどれもが貴重なのに、画面に向かってするなんて、なんてもったいない。これではコミュニケーション能力そのものが育たないでしょう。

遊びの醍醐味（だいごみ）を知った子は、絵本の『いない いない ばあ』を読んでもらうと、きゃっきゃっと笑います。素朴な遊びなのですから、絵にことさらの仕掛けはいりません。いないいないばあをテーマにした絵本はたくさん出ていますが、本書が長い間、子どもたちに愛されてきたのには、ちゃんと理由があるのです。ねこや、いぬ、ねずみたちは、ページをめくると満面の笑みで子どもの前に現れます。まっすぐ正面を見つめる顔が、子どもたちに「ばあ」と呼びかけているのです。出てくる顔がどれも嬉しい顔だから、赤ちゃんは安心して絵本をのぞきこみます。いないいないばあというあそびの意味をきちんととらえている絵本と言えるでしょう。動物たちは妙に擬人化されず、温かくのどかです。今どきの絵本に比べれば地味な色合いにも見えますが、大事なことは遊び心そのものを味わうことにあるのですから、文中の動物たちに声をかけたくなるような自然な色彩がこの絵本にぴったりです。

絵本を読んでもらったら遊びたくなる、遊んだあとでまた見る。幾度も続くこの往復が、赤ちゃんの遊びを育て、読んでもらう歓びを育てることにつながります。いないいないばあの絵本には仕掛け絵本やキャラクターものも多くありますが、おもちゃのような絵本ではなく、子どもに静かに深く向き合うものを選びたいですね。保育学生たちも、初めは見た目のかわいらしさや華やかさに軍配を上げたけれど、子どもと絵本と遊びの関係を知るほどに、この絵本の良さに気づいていきました。どんなに忙しくても、いないいないばあは、大人が直接子どもを楽しませるものでありたいと思います。

童心社 創業60年を迎えて

―ずっと子どもと　もっと子どもと―

イラスト／いわさきちひろ「赤と黄のひなげし」（1971年）より

この三月、童心社は創業六〇周年を迎えました。今回の特集では、出版社としての六〇年の歩みを振り返りながら、童心社に縁の深い作家、画家をはじめとする、子どもの本に関わる方がたからのメッセージをご紹介します。

アーサー・ビナード先生

辞書によれば「童心」の意味は「純真でけがれのない心」になる。が、ぼくは『裸の王様』のインチキを見抜く力も、「童心」に含まれていると思う。今まで童心社に幾度となくお邪魔して、この出版社はそんな強靭（きょうじん）な童心を持つ人材に支えられていることを実感した。これからも社名に違わず、一緒に励みたいと思う。

いわむらかずお先生

こどもたちに向けて、良質な紙芝居や本を贈り届けようと六〇年出版を続けてこられた誠実な姿勢に敬意を表します。絵本作家の私にとっても、自らの作品を託することが出来る、もっとも信頼できる出版社です。

内田麟太郎（うちだりんたろう）先生

わたしは童心社から絵本デビューした。ありがとう　童心社。これまでも。これからも。創立六〇周年記念おめでとうございます。

佐々木宏子先生

六〇年という歳月は、太平洋戦争後の復興から高度経済成長の崩壊までを含む激動の時代であり、この間、数多くのロングセラー絵本を生み出された努力には、心から敬意を表します。歴史を直視する絵本の数々には、童心社の魂をいつも感じております。

谷口広樹先生

私は童心社と同い歳。小四のとき買った『わたしがちいさかったときに』が童心社との最初の出会い。それがあってなのか、仕事をさせていただくようになっても、なぜか太平洋戦争に関連するものが多く不思議なものを感じます。せっかくの同級生です。これからさらに濃ゆ～くおつきあいさせてくださいな。

田畑精一先生

六〇年前、童心社が生まれたころ、東京の街にはまだ色濃く戦争の傷跡が残っていた。そして童心社は、平和の喜びを胸いっぱいに、溌剌として新しかった。しかし六〇年が過ぎた今、残念ながら世界は、再び混沌として出口のみつからぬ暗闇だ。

童心社の仲間よ、暗闇の中で光を輝かせ、進む道を照らし出すような、そんな本を作ってほしい。子どもが大好きになって胸ときめかす、そんな本を。

得田之久先生

五〇年前、初めて四谷にあった童心社を訪ねると、階段がギシギシなる小さな小さな社屋でした。大丈夫かな？（失礼）と思ったのですが、現在巣鴨の住宅地に建つ新社屋は、絵本出版社の中でも美しく立派になりましたね。本当におめでとうございます。

僕も会社にふさわしい著者になるように頑張ります。

とよたかずひこ先生

童心社が創立した頃、私は仙台で小学四年生をやっていた。同学年六〇〇人、有象無象の中にいた。街頭紙芝居はあったが「現金」を持ち合わせていない少年は見る事はできない。それを逆バネに今は創って演じる側に回った。タダ見ＯＫ！

長野ヒデ子先生

誇れる文化・紙芝居の出版をかかげて六〇年！　紙芝居にこだわり、世界に羽ばたかせた功績は大きい。だからこそ絵本の特性もしっかりつかみとり、絵本も紙芝居もロングセラー作品を揺るぎないものにしてきた、子どもの味方の出版

１９５７年	紙しばいの出版社として、童心社創立
１９５８年	定期刊行紙芝居『よいこの十二ヵ月』がスタート 紙芝居『お月さま　いくつ』を出版。
１９６０年	初の児童図書を出版。 『あいうえおのほん』〈第八回サンケイ児童出版文化賞受賞〉
１９６２年	『ね、おはなしよんで』を出版。（以下、「～を出版。」を省略）
１９６３年	読者と童心社をむすぶ定期刊行紙「母のひろば」を創刊。 表紙はいわさきちひろ先生。
１９６５年	「母のひろば」一一号から月刊誌となる。題字は浜田廣介先生。
１９６７年	『いない　いない　ばあ』『いい　おかお』 『わたしがちいさかったときに』 「母のひろば」創刊一〇〇号。
１９６８年	「かこさとし　かがくの本」シリーズ〈第一七回サンケイ児童出版文化賞〉 紙芝居『おとうさん』〈第七回五山賞画家賞〉
１９６９年	紙芝居『天人のよめさま』〈第八回五山賞作家賞・画家賞〉
１９７０年	紙芝居『あひるのおうさま』 紙芝居『たべられた　やまんば』〈第一〇回五山賞画家賞〉
１９７１年	『ねしょんべんものがたり』
１９７４年	『ばけものづかい』 『ひとつめのくに』 『おしいれのぼうけん』
１９７６年	「かこさとし　からだの本」シリーズ 『祇園祭』〈第六回世界絵本原画展金牌〉

社！　さあ、これからが大事なはじまりです！

なかやみわ先生

六〇周年おめでとうございます！　御社は、時代が急速に変化しても、「子どもたちの笑顔」と「平和」を重んじ、私たち作家に、作品を発表する場を与えてくださいました。本当に心から感謝しております。

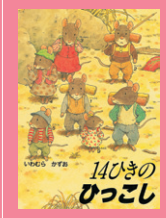
細谷亮太先生

絵本、紙芝居、両方の制作に関わらせてもらえるのはとても嬉しい。絵本の読み聞かせは親子が同じ方を向き、紙芝居では双方が向かいあいます。おんぶと抱っこの違いみたいと小児科医は思います。どちらかを選べと言われると、どちらも捨て難い。六〇周年おめでとうございます。これからもよろしく。

まついのりこ先生

理想の「松明」をかかげた六〇周年。おめでとう！　ほんものの紙芝居文化と平和を、深く美しく輝かせる、なんてすばらしい六〇年でしょう。子どもたちの未来をきり拓く、童心社の歩みに、私は感謝いたします。

1978年	『じごくのそうべえ』〈第一回絵本にっぽん賞〉
1983年	紙芝居『おおきく　おおきく　おおきくなあれ』 〈第二二回五山賞作家賞・画家賞〉 『14ひきのひっこし』『14ひきのあさごはん』 〈第六回絵本にっぽん賞〉
1985年	『さかさまライオン』〈第九回絵本にっぽん賞〉
1993年	創立三五周年記念「全集　古田足日　子どもの本」
1995年	『さつまのおいも』
1996年	「怪談レストラン」シリーズがスタート
2001年	『くれよんの　くろくん』 『どんどこ　ももんちゃん』〈第七回日本絵本賞〉
2004年	「わたしたちのアジア・太平洋戦争」シリーズ
2006年	「母のひろば」創刊五〇〇号。 東京都文京区に社屋を移転。 四階「KAMISHIBAI HALL」こけら落とし。
2007年	『バスがきました』
2011年	「日・中・韓平和絵本」シリーズ出版スタート
2012年	『さがしています』〈講談社出版文化賞絵本賞・産経児童出版文化賞ニッポン放送賞〉 『おしいれのぼうけん』が二〇〇万部突破
2015年	『くれよんの　くろくん』が一〇〇万部突破
2016年	『いない　いない　ばあ』が六〇〇万部突破 「14ひきのシリーズ」が七〇〇万部突破



三浦太郎先生

童心社六〇周年おめでとうございます。ぼくは絵本を作ってまだ一二年です。この六〇年は童心社と作家の試行錯誤の歴史でしょうか。また新しく始まる次の一〇年、ぼくもこれまでにない絵本を童心社の歴史に残せたらと思っています。

宮川ひろ先生

「童心社」なんと温かい社名でしょう。子どものしあわせと、平和への熱い想いを大きな柱として、地道に歩んでこられた六〇年の道のりです。ずっと読み継がれている絵本も、童心社の母体である紙芝居も、いま世界に羽ばたいています。六〇周年、おめでとうございます。

和歌山静子先生

おめでとうございます。私も仕事を始めて昨年で五〇年でした。童心社の仕事で強く記憶に残っているのは『ぼく　はずかしいや』。本と一緒に稲庭桂子さんのことを思い出すのは、素敵な編集者だったからでしょう。私は本を作るうえで編集者のあり方がとても大切だと感じているのです。

※まついのりこ先生は、二月一二日にご逝去されました。ご冥福をお祈りします。

ペンペン草

子どもの頃　遊んだ原っぱに
この草があったよ
公園のベンチに寝転んで
あなたがつぶやいた

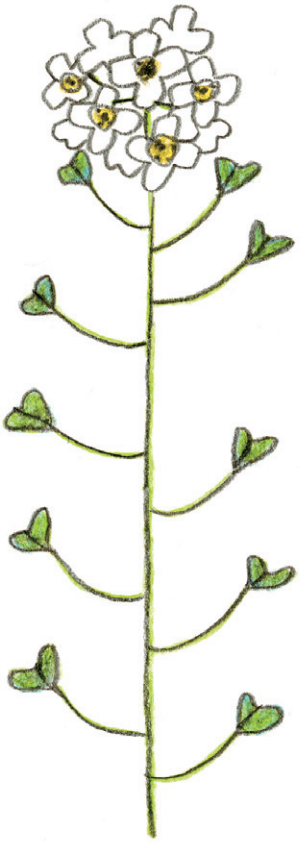
頭の上で　ペンペン草が
風に揺れている

一瞬で　ほら　あなたが
少年に戻って行く
名前を呼ぶ声がして
心が駆け出して行った

子どもの頃　見上げた青空と
同じ形の雲
人差し指で雲のまわり
そっと　なぞってみる

耳の後ろで　ペンペン草の
笑い声がする

一瞬で　ほら　私も
少女に戻って行く
あなたの名前を呼んで
待ってと叫んでいた



新沢としひこ

しんざわ　としひこ／シンガーソングライター。
作詞、作曲のほか絵本、児童文学、紙芝居など作品多数。
主な作詞に「世界中のこどもたちが」「ともだちになるために」「にじ」
絵本に『おてがみちょうだい』（童心社）などがある。

BOOK

カラフルな気分を子どもと一緒に共有！

三輪　丈太郎

「でんしゃがきました」
三浦太郎／さく・え
本体価格1300円＋税

バス停の形から、どんなバスがやって来るのかを想像するのが楽しい『バスがきました』、家に帰る動物たちから、その家の形を想像するのが楽しい『おうちへかえろ』、いずれも次のページをめくる時のワクワク感が魅力です。

この２作の続編ともいえる今作『でんしゃがきました』も、そんなワクワク感に溢（あふ）れた絵本です。駅の名前から、どんな列車が来るのかを想像するのが楽しく、シンプルな駅と、やって来る列車のにぎやかさの差も、そんなワクワク感を倍増させています。

三浦太郎さんの描く絵本は、矛盾する言い方ですが、シンプルであり複雑です。その複雑さとは、「子ども」に妥協することなく真摯に向き合って制作している姿から生まれるもの。その分だけの楽しい仕掛けや工夫を、本の随所に垣間見ることができます。

こんなにカラフルでにぎやかな絵なのに目に痛くなく、こんなに優しい絵なのに「子ども向け」にとどまらず、大人も巻き込まれて楽しめます。「次はどんな電車がやって来るのだろう？」と、子どもたちと一緒にワクワクしながら開いてみると、楽しく、カラフルな気分を子どもと一緒に共有している自分に気付くはずです。

幼児だけでなく、大人も楽しめる今作。細部にいたるまで絵を堪能し、是非ともくり返しのリズムを楽しんで、声に出して読んでみて下さいね。

（みわ　じょうたろう／子どもの本専門店メルヘンハウス）

子どもも、大人も

溝口　義朗

「げんきにおでかけ」
五味太郎／さく
本体価格1000円＋税

「どん」。痛そうな本です。キツネでしょうか。主人公は、どんどん、どんどんぶつかります。ぶつかっては、「いい感じ」のようです。くり返される物語に五味太郎さんの絵は、太い線と柔らかな美しい色で、まるでステンドグラスみたいです。子どもたちと一緒に読んでみます。声をかけるでもなく、ソファーに腰かけて絵本を読みはじめれば、小さな子も大きな子もそれとなくやってきて、読んでいる僕のそばに座りこみます。立ちながらのぞき込んで見ている子もいます。どの子も、じっと絵本の世界に入り込んでいきます。「どん」とぶつかるたびに、くすっと笑いがこぼれます。みんなが笑うので、一緒にいた１歳になったばかりの赤ちゃんも、やっぱり同じように笑います。赤ちゃんは、「どん」が来るたびに、笑うようになります。読んでいる僕も、面白くなります。みんなが共感の世界に包まれます。短いお話の、小さな集団での、共感の世界はすぐに終わってしまいます。けれども、読み終わるとすぐに、もう１度読もうと僕も思いますし、きっと子どもたちも思っています。ですから、また「どん」が始まるのです。３回読みました。４歳の男の子が「へんな、ほんだなぁ」と、ぼそっと嬉しそうに言いました。優しく、美しく、調子のよい、とっても変な本だなぁと、やっぱり僕も思いました。

（みぞぐち　よしあき／保育士、ウッディキッズ園長）

BOOK

３月の新刊図書！

障がい者の仕事場を見に行く（全４巻）

１ ひとのために働く
小山博孝／文・写真

２ 学校で働く
小山博孝／文・写真

３ 伝統や先端の世界で働く
小山博孝／文・写真

４ 私たちのこと、もっと知ってほしいな
松矢勝宏／編著

本体価格2800円＋税
セット価格11200円＋税

障がいがある人たちはさまざまな職場で働いています。保育園、学校、バイオやＩＴの分野でも……。仕事に熱中する姿が、チャレンジする心や働く楽しさを伝えます。

おでかけシリーズ

いそいでおでかけ
五味太郎／さく
本体価格1000円＋税

さるの子がいそいでおでかけ。くつやぼうしをわすれて、そのたびにおうちにもどります。あれ？　まだ、なにかわすれていない？

単行本絵本

わたり鳥
鈴木まもる／作・絵
本体価格1500円＋税

なぜ、どうして彼らは何万キロもの旅をするのか――。世界中のわたり鳥の旅を通して、生命の尊さを描く壮大なドラマ。

日・中・韓　平和絵本

春姫（チュニ）という名前の赤ちゃん
ピョン・キジャ／文
チョン・スンガク／絵
本体価格2500円＋税

お母さんのおなかの中で原爆の放射能をあびた春姫は、43歳になってもおむつをつけたまま横たわっています。

開催中!

童心社60年展
―ずっと子どもと もっと子どもと―

1957年の創業以来出版してきた絵本と紙芝居から、貴重な原画や資料、立体展示など盛りだくさん。ぜひ、足をお運びください。入場無料

2017年3月18日[土]～4月9日[日]
10:00～19:00（最終日は17:00まで）
銀座・教文館ビル（東京都中央区銀座 4-5-1）
（9F ウェンライトホール／6F ナルニアホール）

童心社創立60周年記念

公募のお知らせ

かみしばい作品＆脚本募集！

紙芝居のさらなる可能性を追求するため、新しい作家の発掘を願い、創作紙芝居の作品・脚本を募集いたします。

募集期間：2017年3月1日～2017年7月末日

詳細は童心社ホームページへ　http://www.doshinsha.co.jp

2017年3月15日発行（毎月刊）
母のひろば　第634号
定価50円（年600円／送料とも）
発行所：童心の会
〒112-0011 東京都文京区千石4-6-6
株式会社童心社内
電話03（5976）4402
編集発行人：大熊悟
童心社のホームページ：
http://www.doshinsha.co.jp/
フォーマットデザイン：bise inc.

定期購読のご案内
おハガキにてお申し込みください。下記QRコードからもお申し込みいただけます。見本誌（無料）と振込用紙をお送りいたします。

見本誌に同封されている振込用紙で購読料をお支払いいただきますと、手続き完了となります。
購読料金は1年分600円（送料とも）。

あとがき

●出してきた本が出版社そのものであり、それらの本をつくり読者に届けていく過程で培われた思想がその社の根幹なのでしょう。それなくして長く会社が続いても、さして誇れることではないように思います。創業当初刊行の紙芝居、50年前に出版した絵本が今なお愛読していただける童心社は、なんとも幸せです。これからもよろしくお願い致します。

●退職のため、本誌を担当するのも今号で最後となりました。在籍した間に編集した本や紙芝居、そして出会った方へ思いを馳せながらの編集作業。10年前、「児童書が好き」という気持ちだけを胸に一歩を踏み出した時には想像もつかなかった程の、数限りない〈豊かさ〉に出会うことができ、感謝の気持ちで一杯です。本当にありがとうございました。